

韓国の高等教育における学習環境・学習支援のデザイン
The Design of Learning Environment and Learning Support
for Higher Education in South Korea

川面きよ (成城大学教育イノベーションセンター)

及川ひろ絵 (弘益大学校教養語学部)

遠海友紀 (東北学院大学教養教育センター)

岩崎千晶 (関西大学教育推進部)

嶋田みのり (東北学院大学ラーニング・commons)

千葉美保子 (甲南大学全学共通教育センター)

Kiyo Kawazura (Seijo University, Center for Educational Research and Innovation)

Hiroe Oikawa (Hongik University, Department of Liberal Arts)

Yuki Enkai (Tohoku Gakuin University, Center for Liberal Arts Education)

Chiaki Iwasaki (Kansai University, Division for Promotion of Educational Development)

Minori Shimada (Tohoku Gakuin University, Learning Commons)

Mihoko Chiba (Konan University, Center for Education in General Studies)

要旨

教授パラダイムから学習パラダイムへの転換や ICT 技術の進展に伴い、高等教育において物理的な環境だけでなく人的な学習支援も重要視されるようになってきている。本研究では高い大学進学率を誇る韓国の大学の学習支援環境に注目し、コロナ禍を経た韓国の大学において学習環境がどのように変化し、どのような学習支援サービスが行われているのか、その特徴について明らかにするために現地調査を行った。現地調査の結果、学習支援を担当する組織が大学内で明確に位置付けられ、体系的な支援が行われていること、コロナ禍で始まったオンライン学習支援も依然として提供されていることが確認され、キャンパス内に図書館以外の学習支援環境の実装が進められていることが明らかになった。

キーワード 韓国の高等教育、学習環境、学習支援、ライティングサポート / Higher Education in South Korea, Learning Environment, Learning Support, Writing Support

1. はじめに

教授パラダイムから学習パラダイムへの転換や ICT 技術の発展により教育の現場は多くの変化が求められるようになった。日本の高等教育の学習環境においても施設や設備といった物理的環境だけではなく、そこで行われる人的な学習支援も併せて検討されるケースが多くみられるようになってきた。

筆者らは国内外の学習環境や学習支援サービスについて現地調査し、事例を収集・比較分析する

ことによって、教育改善における学習環境デザインの在り方への示唆を得る取り組みを行ってきた(千葉他、2019)。

本稿では、アジアにおいて日本と同様に高い大学進学率を誇る韓国の大学を対象に現地調査を行った結果について報告する。まず韓国の高等教育の概況とコロナ禍での韓国の大学の学習環境がどのようなものであったかを確認したうえで、現地調査時の施設見学及びインタビュー調査を通じて得た情報をもとに、コロナ禍を経た各大学におけ

る学習環境や学習支援プログラムの実態および特徴を明らかにする。

2. 韓国的高等教育の現状

2.1. 韓国的高等教育の概況

2023年時点での高等教育機関数は総合大学190校、教育大学10校、専門大学133校、産業大学2校、技術大学1校、放送通信大学1校、サイバー大学19校、その他の学校24校の合計380校が設置されている。行政上は日本の文部科学省にあたる韓国教育省（Ministry of Education）の所管となる。

設置主体別にみると国立大学47校、公立大学8校、私立大学325校と、私立大学が約86%を占める。大学生数は約271万人であるが、深刻な少子化を背景に2011年の341万人をピークに年々減少傾向にある。そのため、大学進学率は73.3%を超え、日本や台湾以上に高等教育のユニバーサル化が進んでいる状況にある。

高等教育のユニバーサル化が進む一方で、地方大学や新設大学の定員割れによる経営不振、拡大した大卒生の就職難などの課題が顕在化しはじめた。これらの課題に対応するために2000年代に入ると政府主導による大学構造調整政策が強力に推し進められた。さらに近年は2014年1月に発表された「大学構造改革推進計画」に基づき実施される「大学基本能力診断」と呼ばれる大学機関評価の結果をもとに大学への財政支援を行うことで、運営上問題のある大学の運営の改善や統廃合が促されてきた（独立行政法人大学改革支援・学位授与機構、2019）。そのため各大学では、それぞれの評価指標において、その基準を満たすための取組を行うというサイクルとなっている。学習環境や学習支援もこれらの評価指標に含まれていることから、韓国の多くの大学において学習支援を担う組織と学習環境整備の取組が積極的に進められてきたと考えられる。

一方、大学評価に対応する大学教職員の負担の大きさや評価基準において、大学の特性や地域性が考慮されていないことへの批判もあり、2015年

から3年周期で続けられた「大学基本能力診断」は2021年の第3期をもって廃止となることが決定し、次期評価においては、新たな評価体系が導入される予定である。

2.2. コロナ禍における韓国の教育現場—弘益大学世宗キャンパスの事例—

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により、韓国の教育現場においても急激なパラダイム変化が起こった。対面型オフラインで大部分行われてきた講義が急遽、非対面型オンラインに変化したのは韓国でも同様である。こうした現状は韓国の学習支援にも大きな影響を与えたため、ここでは韓国の大学の一例として、コロナ禍における弘益大学世宗キャンパスの当時の状況を紹介する。弘益大学はソウル特別区新村に本部を持つ私立総合大学である。世宗キャンパスは4つあるキャンパスのうちの一つで、ソウルからKTX（高速鉄道）で約1時間の距離にある世宗特別市に位置する。キャンパスに通う学生数は約6,000名である。

2020年3月、韓国の多くの大学は例年の3月開講を延期し、十分な準備期間を経ずにオンライン化に対応せざるを得ず、それは弘益大学でも同様であった。Web会議システム（Cisco Webex Meeting）を用い、リアルタイムで講義を行う同期型オンライン授業を実施することとなった。例年より2週間遅れで新学期が開始、全ての講義を遠隔で行うことが原則とされた。

講義及び受講生の管理は従来通り大学のLMSを使用し、2020年1学期の場合、中間テストはオンライン、期末テストは対面で行われた。2020年2学期は中間・期末共にオンライン、2021年度は年間を通し中間・期末テストは対面、講義はオンラインであった。

2022年1学期より2年ぶりに対面授業が始まったが、感染した学生も受講可能になるよう同時型ハイブリッド式で行われ、対面講義参加の場合は全員マスク着用が原則とされた。2022年2学期よりマスク着用は個人の自由、及び対面のみ出

席認定に移行され、基本的にコロナ禍以前の通常形態に戻った。

コロナ禍における対応の一つとして着目すべきは評価方法の緩和である。評価方法は従来の相対評価のままではあったが、相対評価における割合の緩和、学生の要請に応じ Pass 変換（合否で評定される）を認める制度が一時的に導入された。なお当初、講義のオンライン化は同期型オンライン授業が原則とされたものの、コロナ禍が長引くにつれ詳細は各教員に委ねられた。筆者の場合、教養日本語科目を担当していることもあり、対面コミュニケーションに最も近い形式が同期型オンラインであるという認識のもと、オンデマンドは行わなかった。

学生らが当時の状況を如何に捉えていたかに関し、2023年12月中旬、①オンライン授業のメリットとデメリット、②コロナ禍の大学の対応として印象的な事柄などに関しインタビューをした。

学生A（映像アニメーション専攻、2021年1学期「教養日本語2」受講 当時2年生）は「通学時間の短縮になったのは良かったが、学生同士の交流ができなかったこと、カンニング防止処置としてテスト中の自分を写すためのカメラ設置などが大変だった。日本語の授業は先生とのやり取りはできたが、学生同士で円滑な会話練習は難しかった。専攻科目では実習ができず、授業が進められていったので大変だった。でも、全体的に成績が緩和されたのは良かった。」と回答した。学生B（バイオ化学専攻、2020年1学期「教養日本語1」/2021年2学期「教養日本語2」受講 2020年当時2年生）は「家でリラックスして勉強することができたのは良かったが、オンライン講義は集中できず勉強した感じもせず、音が途中で聞こえなかったりして大変だった。日本語の授業は特に問題はなかったが、専攻の場合は学科の特性上、実験は必須なのに実験映像を見てレポートを書く作業のみで不十分だった。成績評価の基準が緩和されたのは良かったが、講義の内容が自分の頭にちゃんと残っていない。」と回答した。

別途、学習支援センター（勤務校での呼称は教

授学習支援センター）の担当教員に2023年12月中旬、①コロナ禍当時の状況及び対応、②今後の課題などに関しインタビューを行った。以下にその内容を整理する。

コロナ禍では全面オンラインサポートで対応したが、2020年の1学期、2学期共に学生参加率は減少した。その理由はおそらく Webex の使用に慣れていないことが背景にあると考えられるが、2021年は参加率が増加、現在はまた減少傾向にある。

なお、センターは三つの柱を中心にサポート事業を行っており、第1に動画による学習方法及び教授方法のサポート、第2に学生向けのライティングサポート、第3に自主学習サークルサポートである。その他、中国人留学生向けのサポートとして国際交流事業があるが、コロナ禍当時はいづ留学生の韓国入国が可能になるかわからない不安定な状況にあり、事業を行うためには報告書の問題などもあり、サポートができずにいた。現在もサポートが再開できない状況にある。また地方キャンパスの特性上、オンラインの方が集まりやすいが、参加率を伸ばすにはどうしていかかが今後の課題である。

大学における講義は前述した通り全面对面に戻ったが、学習支援センターの活動はコロナ禍以降の現在もオンライン中心の状況である。コロナ禍で得られた新しい行動や戦略を今後どのように実践の糧としていこうかが全体的課題であると言えよう。

3. 調査報告

以下では、2023年8月に実施した現地調査時の情報をもとに、訪問した4つの大学における学習環境および学習支援プログラムについて、各大学の特色および特徴的な取り組みを報告する。

調査対象は、韓国教育省のデータや学習環境に関する先行研究等を参考に、設置形態および規模に配慮して選定し、ソウル特別地域内に位置する国立ソウル大学、私学TOP3に数えられる高麗大学、女子大学TOPの梨花女子大学、中堅私立総

合大学に位置づけられる世宗大学の4大学に訪問した。

各大学では学習支援を担当する教職員へのヒアリングおよび実際に学習支援に利用されている施設を見学した。以下、訪問順に報告を行う¹⁾。

3.1. 梨花女子大学

梨花女子大学は、韓国初の女子大学で、1886年にキリスト教のアメリカ人宣教師によって創設された私立大学である。世界ランキング (THE) は、601-800位となっている。15の学部で構成され、大学院は一般大学院、専門大学院、特殊大学院の3つの領域がある。学生数は、2023年10月時点で20,189名 (うち、学部生は14,324名)、専任教員数は969名となっている。本調査では、Global Language Education Office (以下、GLEOと略記) と100周年記念中央図書館への視察を行った。

3.1.1. Global Language Education Office

GLEOには英語の専任教授と講師、第二外国語 (ラテン語、スペイン語、ロシア語) の教員、ディレクターと3名のアシスタントが在籍している。GLEOは、すべて英語で行われる教養英語科目を提供するだけでなく、GLEOマルチメディア実習室の運用や、ライティングクリニックや英語ラウンジ (Elounge) などの学生向けの支援の運用、教員向けには校正/修正サービスなどを展開している。今回の視察では、主にライティングクリニックについてインタビューを行った。また、Eloungeを視察した。

3.1.2. GLEOのライティングクリニック

ライティングクリニックは2001年9月に設立された。GLEOがキャンパスの中央に設置されている建物の中にあるため、ライティングクリニックも学生がアクセスしやすい場所にある。授業期間中は月～金の10:00～17:00で対応しており、支援の対象はGLEOで提供している英語の授業を受講している学部生である。そのため、相談に来るのは1・2年生が中心になっている。

ライティングクリニックでは、コンサルタントと呼ばれる大学院生が相談者に対応しており、相談は1回30分で、英語での文章作成について韓国語で対応している。コロナ禍に入り、Zoomを使ったオンライン対応も始めたが、現在は対面での対応を希望する学生のほうが多い。基本的に予約制になっているが、空きがあれば予約なしでも対応している。



図1 ライティングクリニックの相談スペース

相談では、添削をするのではなく、相談者に質問を投げかけることで問題を明確にし、必要な対応を検討する。授業によってはルーブリックなどの評価が提示されていることもあるので、その際はそれを確認しながら対応している。相談後、コンサルタントは相談記録をまとめたシートを作成し、クリニックの担当教員に提出する。相談記録の内容は授業担当者にもフィードバックされるため、授業担当者は学生へのケアや授業内容の検討に役立てることができる。

コンサルタントは英語に関する分野を専攻している学生で、訪問時は7名在籍していた。彼らは1年ごとの契約で、週10～12時間程度勤務する。勤務管理はアシスタントが行っている。コンサルタントの採用には、ロールプレイングで相談対応のスキルを確認し、クリニックの担当教員が評価をする。評価の結果、即採用の場合とトレーニングが必要と判断される場合がある。また、コンサルタントには、セメスターの始めに2時間半程度の研修が実施されている。研修では、質問の仕方

や文法、学生のレポート上の課題をどう修正するかなどについて、ブレインストーミングやロールプレイングを行っている。

個別相談以外の支援として、特にライティングに関する教材は作成していないが、GLEOのHPにライティングの際に有用なページのリンクを掲載するなどの情報提供が行われている。

3.1.3. GLEOの英語ラウンジ (Elounge)

Eloungeは学部生が楽しくリラックスしてネイティブの留学生と英語で会話できるように設計されている。チュータリングでは、チューターとのフリートークや社会問題についてのトーク、TOEFLのスピーキング対応、ビジネスインタビュー対応などを行っているが、授業での課題への対応はしていない。対応は1回30分で、予約制になっているが、空きがあれば予約なしで対応している。また、英語の雑誌やDVDなどの資料が多く設置されており、資料の閲覧は自由にできる。



図2 Eloungeの様子

3.1.4. 100周年記念中央図書館

100周年記念中央図書館は1984年に完工し、1986年5月の創立100周年記念日に奉献された地下2階、地上5階建ての図書館である。24時間利用できる施設として、図書資料や視聴覚資料、学術データベース、電子ジャーナル、電子書籍などを学生に提供している。

コロナ禍以降、学生に実施したアンケートの結果を踏まえ、施設を順次リモデリングしている。アンケートの結果、学生は広いスペースより、個人的な空間を好むことが明らかになったため、そ

れに合わせて、個人や小グループで学習に取り組める場所を増設した。その結果、資料を自由に閲覧できる空間、集中して学習に取り組むための空間、チームで取り組むプロジェクト活動に利用できる空間などが提供されている。

例えば、小グループで利用できるクリエイティブスタディルームには、ホワイトボードや大型テレビ、ヘッドホンなどが設置されており、図書館HPから予約をして使えるようになっている。また、DVDなどの視聴覚資料を提供するメディアステージでは、その場で資料を視聴することができるようになっており、個人でみることもできるが、授業課題などのためにグループで視聴できる場所も提供されている。

3.2. ソウル大学

ソウル大学は韓国のトップ層に位置する国立大学である。世界ランキング (THE) では、62位、韓国国内では1位となっており、韓国の最高学府となっている。学生数は20,273名、教職員数は5,802名であり、15学部を有している。本調査では、教育開発支援センター (以下、ソウル大CTLと略記) への視察を行った。ソウル大学には教養教育を担う基礎教育院があり、ソウル大CTLはそこに位置付けられる。

3.2.1. 基礎教育院とソウル大CTLの概要

基礎教育院は教育全体を企画する重要な教育機関となっている。ソウル大CTLは基礎教育院の下部組織として、大学執行部からの意向に沿った活動を行っている。基礎教育院は1・2年生の受講が多い共通教養科目の管轄を担っている。これらの科目は基礎教育院の学舎で実施され、下位学年の学習者が学びやすく使いやすいデザインとなっている。例えば、アクティブラーニングを実施しやすいように、定員20-25名程度の教室が配置されている。学習支援に関しては、正課の学習に対する支援に限らず、学生の心理的な相談に応じる支援もある。ここでは学習相談室として、発達障害等の学生達の相談に対応しており、毎月約70

名の学生が利用している。ほかにも学生の書く力を育むためのライティングセンター（以下、WRCと略記）が設置されている。ソウル大学ではWRCでの取り組みが充実しているため、次項ではWRCでの支援を取り上げる。

3.2.2. ライティングセンターにおける学習支援

ソウル大学のWRCは元々独立した組織であったが、現在はソウル大基礎教育院のCTL内に位置付けられている。WRCでは従来1対1の個人相談やセミナーを中心に実施していたが、現在はより多くの受講生が受講できるプログラムの提供にも力を入れている。例えば、セミナーの実施、より効率的に多くの学習者が学べるように動画提供、全体のための資料開発等を行なっている。

相談に応じる場所は基礎教育院の1Fにあり、6つの部屋がある。相談をしている様子が見えるように、WRCの部屋は外から中の様子が見えるような工夫がされている



図3 ライティングセンターの相談スペース

個別相談はコロナ以前は対面のみであったが、コロナ以後は対面とオンラインで併用して相談をしている。対象者は韓国人の学生と留学生となっている。韓国語を母語とする学生への相談支援の時間は1回40分程度、留学生は1時間程度実施している。ライティングの相談は年間3,500件である。内訳は1,000件から1,200件が授業連携であり、それ以外は自主的な利用となっている。ライティングアクロスザプログラムに参加している

学生は教員からの推奨がされてWRCで相談をしていることが多い。

個別相談の対象者は学期中は学部生が中心であるが、長期休業期間に入ると大学院生も利用できる。ただし利用回数は6回のみになっている。とりわけ新生は「初めてのアカデミックライティングをどう書けば良いのかわからない」という不安感をもっており、その対応が重要であることが示された。例えば、大学には、ソウル中心部から学力試験に合格をして入学をした学生と、韓国の入試システムで農村地域における優秀な学生が入学した際、能力が異なる場合もある。こうした際に学生が自律的に学ぶことができるようにWRCでは書くことの支援が行われている。

チューター数は30名程度で、大学院生がチューターとして勤務している。修士課程と博士課程の院生が勤務しているが、博士課程の院生が中心である。チューターの中には、1週間に20時間働くチューターが6名おり、通常の相談業務に加えて、大学が主催する作文コンテストの審査など個別相談以外の業務も担当している。残りのチューターは、オンラインで勤務しており、自宅や他の場所から相談に対応している。

WRCは3時間程度の研修をチューターに提供している。研修では講師を招き講義形式でおこなったり、実際の学生のレポートをもとに、30分程度のケーススタディを実施したりしている。またチューターがうまくいったケースを選んで、発表したり、特別な支援が求められるケースを選定して、皆で議論したりすることも行っている。

ほかにもWRCの活動として、優秀なレポートを表彰する大学主催の作文コンテストを実施している。セメスターの最後に、優秀レポートの公募をしている。各学期末に提出されたレポートに賞を出している。最優秀賞、優秀賞、奨励賞がある。これは学生のモチベーションを上げるために実施されており、毎回約150件の応募がある。

審査方法としては、スタッフが予備審査を担当して、30件に絞った本審査は基礎教育院の教員が対応している。審査の基準は「主題テーマ、創造

性、論理的な構成、文章表現力、新規性」などである。学生はレポートを提出する際に、担当教員の許可を得る必要がある。また教員からコンテストへの参加を打診されることもある。教員は選出されたレポートに倫理的な問題がないのか、剽窃がないのかについて事前に確認する必要がある。作文コンテストで表彰されたレポートは冊子として公表される。学習者間で良い事例が共有されることは学生の書く力を向上させるうえで有益な取り組みだと言えるだろう。

3.3. 高麗大学

高麗大学は、SKY（ソウル大学、高麗大学、延世大学）と呼ばれる名門大学の一つで世界ランキング（THE）では、201-250位に位置する私立総合大学である。学生数は37,053名、教職員数は5,007名であり、22学部で構成されている。本調査では、教育開発支援センター（以下、高麗大CTLと略記）の視察を行った。

3.3.1. 高麗大CTLの概要

高麗大CTLは、教授学習法の研究開発や支援を通じて、社会のニーズに応えるグローバルリーダーを養成することを目的に、2003年に設立された。FDや学習支援を担当する教授・学習支援部門、MOOCや学内のICTを管理・運営する遠隔教育部門の2部門体制で運営されていたが、2023年9月にコンテンツの制作を担う教育メディア支援部門が設立され、現在は3つの部門で構成されている。高麗大CTLには、19名の専任教員と助手など合わせて約30名の教員が在籍している。

3.3.2. 高麗大CTLの学習支援プログラム

高麗大CTLでは、学部生および大学院生を対象に4つの学習支援プログラムが展開されている。具体的には、ピア・チュータリング、協働プロジェクト、自己主導型学習プログラム、アカデミックコーチングである。なお、高麗大学では、ライティング支援も実施されているが、別組織が担っている。以下では高麗大CTLが実施している4

つのプログラムについて紹介する。

1つ目のピア・チュータリング（Korea University Peer Tutoring:通称KUPT）は、主に基礎科目の学習に課題を抱える学生の支援を目的に実施されている。あらかじめセンターによって指定された基礎科目や学生から要望があった科目のチュータリングや英語学習に特化したチュータリングが行われている。実施方法にはいくつかあり、基本的には、学期ごとに該当科目のA以上の成績を修めた学部生チューターが、科目ごとにコースを開設し、参加したい学生を募って実施している。また、学生がサポートを受けたい科目を申請してセンターがチューターをマッチングして実施する場合や、同じ科目を履修する学生がグループを作って申し込み、学生同士で相互に教え合う場合もある。この他に、数は少ないが、留学生委員会や、成績不振者や配慮を要する学生を支援する委員会の要請によって行われる場合もある。各チューターは、1~4名程度の学生を受け持つ。所定の時間（12週間20時間以上）活動すると、活動支援金（75万ウォン）と修了証が支給される。また、チュータリングを受けた学生には、活動参加証明書が発行される。2023年度は、予算の都合上、計30コースを上限に実施された。またこの他に、大学院生を対象にしたチュータリング（KUPT+）も実施され、9コース開設されている。

2つ目は、協働プロジェクト（Collaborative Projects）である。その中でもCCP（Creative Challenger Program）は、15年間続いている人気のプログラムである。CCPでは、学生自らが設定したテーマについて、チームで9ヶ月間プロジェクト活動を行う。毎年参加希望者が多いため、年度はじめに募集、選抜を行う。本年度は、16チーム約100人の学生が選抜された。選考は、参加する学生の学年や専攻、成績などは問わず、プロジェクトのテーマや実現可能性を考慮して行われる。採択されたチームは、中間レポートの提出や年度末の成果報告会での報告をする必要があり、センターの教員が適宜助言をしている。それ以外

にも各テーマに近い専門分野の教員に学生が自ら頼み、助言をしてもらうこともある。また最近では、企業が参画するようになり、企業の寄付金によって進められているプロジェクトもある。

3 つ目は、自己主導型学習 (Self directed learning) プログラムである。このプログラムでは、タイムマネジメント、目標設定、プレゼンテーションなどの学習スキルのセミナーを外部講師を招いて実施している。また、各学科の優秀な学生にノートの取り方などの学習方法やノウハウを紹介する動画を有償で制作してもらい、新入生向けの授業のオンデマンド教材として使用している。

4 つ目は、アカデミックコーチングである。このプログラムでは、学生の学業の成功と学生生活の適応のための支援を、個人またはグループ単位で行っている。コーチングの内容は、履修支援や生活全般にわたっているが、新入生に対しては、大学適応に関するコーチング、4年生に対しては進路に関するコーチングを行うことが多い。また特定の科目に対する支援も行っており、例えば、数学が苦手な学生には、それに対応できるコーチをマッチングしている。コーチは、CTLが開講している養成講座を受講した大学院生や心理学専攻の大学院生が担っており、所定の研修や実習にすべて参加すると、奨学金支給 (20万ウォン) と修了証が受け取れる。本プログラムは、毎年300~400人が利用し、コロナ禍以前から需要が高い状況が続いている。スタッフによると、「相談」や「支援」ではなく「コーチング」という名称にしたことにより、学生の心理的ハードルが下がったことが利用者が増加した要因であるという。現状の学生コーチの人数では対応しきれないため、一部は外部業者に委託しており、こうした高い需要にいかに対応するかに加え、支援の質の向上が課題であるという。

このように、高麗大学では、学生同士の学び合いや学生の自立的な学習を促すプログラムが多く実施され、どのプログラムも利用者が多い状況であった。「高麗大学はもともと主体的な学生が多く、学生同士の自主的な学習グループが上手く機能し

ている。CTLの役割はそうした学生をサポートすることである」というスタッフの言葉が印象的であったが、こうした主体的な学生の気質や大学の文化に加え、学習支援プログラムに参加することが有益であると学生自身が実感していることも利用者が多い要因であると推察される。

3.4. 世宗大学

世宗大学は、京城人文学院、ソウル女子学院を起源とし、1987年に総合大学となり世宗大学に改名し現在に至っている。世界ランキング (THE) は、251-300位となっている。11学部で構成され、大学院は7研究科がある。学生数は、2023年4月時点で15,495名、専任教員数は555名となっている。本調査では、創造教育開発研究所の組織のひとつである教授学習開発センター (以下、世宗大CTLと略記) への視察を行った。

3.4.1. 教授学習開発センターの概要

創造教育開発研究所には世宗大CTLをはじめとし、カリキュラム評価センター、世宗MOOCセンター、比較・統合支援センターの4部門が組織されている。今回訪問した世宗大CTLは、大学教育の質を向上させるため、教育・学習に関する専門的な研究・支援プログラムを運営する部門として展開されており、現在11名のスタッフで運営されている。センターの主な活動は、教授支援と学習支援に分かれている。教授支援はソウル大学をはじめとした他大学での動きを受け、支援が開始された。反転学習やPBLの支援、教員向けセミナーを行うほか、授業コンサルティングなど支援は多岐に渡る。

また学習支援では、基礎学力向上、意欲の向上を目指し、多様なプログラムが実施されている。ライティングサポートは他部門が担っており、世宗大CTLとの連携は現時点では行っていない。

3.4.2. 学習支援の概要

世宗大CTLの学習支援では、主に学部生を対象として、基礎学力の向上と意欲の向上を目的に、

アカデミックコーチングやクリエイティブ・シェアリング・チュータリングをはじめ9つのプログラムを提供している。世宗大 CTL では、特に成績不振学生に対する支援を重視しており、警告が出るような学生には別のプログラムを実施している。さらに、学生支援課と連携して、悪い成績を取った学生は、プログラムへの参加により再度履修できるようにする等の支援をしている。コロナ前に比べ、成績不振者が増加したこともあり、プログラム参加者は拡大傾向にあるという。以下では特徴的であったチューターの選考や、奨学金制度に紐づくマイレージシステムとの連携について紹介する。

3.4.3. 学部生チューターによる支援

学習支援プログラムのひとつ、「クリエイティブ・シェアリング・チュータリング」は、専門科目の内容に精通した学部生チューターが、学習困難を抱える留学生や編入生などのチューターを教え、支援する協同学習プログラムである。

チューターは自発的に登録しコースを設置する。人数が多い場合は、成績が低い学生を中心に選考され、1人のチューターに対して4人程度の学生、2023年度前学期には70コースが運営されたという。対象は新生、成績不振者、復学者などである。チューターは前学期にA以上の成績で対象科目を修了した者、または前学期に総合 GPA 4.0以上で修了し、担当教員の推薦・承認を受けた者が対象となる。

この活動の際、チューターはチュータリングに関する計画書を作成し、活動記録を提出する必要がある。また、チューターの育成として、最初に1時間程オリエンテーションを受け、中間期にも1時間程度のミーティングを実施する。

このプログラムは単位外のプログラムであるが、チューターは奨学金およびマイレージが与えられ、参加する学生にもマイレージが貯まり、加えてチューターからノウハウを聞くことができる。このプログラムは、当初なかなか参加人数が増えなかったが、教員が編入生や留学生へ参加を促し、次

第に定着するようになった。

3.4.4. 比較学マイレージ奨学金制度

世宗大学では、比較学カリキュラムの活性化を図るため、2019年度から比較学マイレージ奨学金制度 Comparative Mileage Scholarship を実施している。この制度は全学的なものであり、課外イベントに参加した学生には、プログラムごとに付与されたマイルが自動的に付与され、比較研究プログラム修了で蓄積したマイレージに応じて奨学金が授与されている。

CTL が提供する学習支援の各プログラムもまた、このマイレージ制度の対象となっている。マイレージ対象となるイベントは、CTL 側で決定している。学習支援プログラムは、これまで学部毎に周知を行っていたが、このマイレージ制度を始め、学生への周知が行き届くようになった。

以上、世宗大学で提供されている学習支援や、全学的に導入されているマイレージ奨学金制度を紹介した。上述の通り、プログラム設置当初は利用数も少ない傾向にあったものの、次第に定着し、特にコロナ禍を契機とした成績不振者の増加に伴い、支援ニーズは非常に高まっている。また、チューターによる学部生の自主的な活動も活発に行われていることが伺えた。日本の大学でも、スタディグループ等が導入されている事例はあるが、韓国のように自発的な動きに対して支援をする仕組みは十分ではない。また、世宗大学において、これらの学習支援プログラムが全学的に展開できている背景には、マイレージ制度との連動もあるだろう。このような奨学金制度との連携も、学習支援を全学的に展開する上で重要であるといえる。

4. おわりに

本稿では、韓国の高等教育の概況とコロナ禍での韓国の大学での学習環境の変化を実際に体験した立場から振り返ったうえで、現地調査を通じて得た韓国の高等教育機関における学習環境や学習支援プログラムの実態及び特徴について、それぞれの機関の特色を踏まえながら論じてきた。

いずれの大学においても学習支援を担う組織が明確な役割をもって組織の中に位置付けられており、組織的かつ体系的な学習支援が行われていた。これは先述した通り 2000 年代初頭より進められてきた政治主導による大学評価の評価基準に対応してきた結果であるといえよう。また韓国の大学では、2022 年度に入ると正課の授業自体はほぼ対面に戻ったものの、学習支援については変化した学生の学びのスタイルに合わせて、依然としてオンラインでのサービス提供も行われている。今回訪問した機関でも、対面での活動と並行してオンラインのメリットを生かした支援が維持されていることも確認できた。

呑海他 (2013) が 2012 年に行った韓国の大学図書館を対象とした学習支援空間に関する調査では、韓国の大学図書館は「インフォメーション・コモنزの段階にとどまっており、学生の学習を直接支援するラーニング・コモنزの段階には至っていない。」ことが指摘されていた。今回の調査を通じて、10 年間の間に学習支援環境をとりまく状況の変化とともに直接的な学習支援の機能が図書館外ではあるが、キャンパス内に実装されている状況が確認できた。

大学基本能力診断評価に代わる次期の大学評価においては、画一的と言われる評価指標の見直しが予定されていることもあり、今後はより各大学の特性を反映した特色ある学習支援環境の整備が進められると考えられる。今回叶わなかったソウル以外の地域の大学の取組も含めて、引き続き注視していきたい。

註

¹各大学の情報は訪問時に聞き取った情報と、以下の各機関のウェブサイトの情報をもとに記述している。

梨花女子大学

<https://www.ewha.ac.kr/ewhaen/index.do> (2023 年 12 月 31 日)

ソウル大学

<https://en.snu.ac.kr/index.html> (2023 年 12 月 18

日)

高麗大学

<https://www.korea.edu/mbs/home/mbs/en/index.do> (2023 年 12 月 20 日)

世宗大学

<http://www.sejong.ac.kr/> (2023 年 12 月 31 日)

参考文献

千葉美保子・川面きよ・遠海友紀・嶋田みのり・岩崎千晶 (2020) 「台湾の高等教育における学習環境・学習支援のデザイン」『関西大学高等教育研究』11, 121-129.

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構 (2019) 『諸外国の高等教育分野における質保証システムの概要 韓国 第 2 版 (2019 年版)』 (https://www.niad.ac.jp/media/008/201903/overview_ko2_j.pdf) (2024 年 1 月 4 日)

呑海沙織・溝上智恵子・孫誌銜 (2013) 「韓国の大学図書館における学習支援:インフォメーション・コモنزからの飛躍に向けて」『図書館情報メディア研究』11(1), 47-58.

Korean Educational Development Institute (2024). *Higher education statistics survey*, (<https://kess.kedi.re.kr/eng/index>), (2024.1.4).

文部科学省 (2022) 『諸外国の教育動向 2021 年度版』, pp.250-257.明石書店.

Times Higher Education. (2024). *World University Rankings 2024*, (<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2024/world-ranking>), (2024.1.22).

付記

本研究の一部は JSPS 科研費 JP22K02844、JP23H00999、JP21K02667、JP20K14032、JP20K03100 の助成を受けたものです。

謝辞

本調査にあたり、現地調査に対応してくださった各大学関係者に感謝する。